
孤独の人

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独の人

【Nコード】

N5187J

【作者名】

羅幻徒

【あらすじ】

寡黙な同僚が自殺する。静かな外面からは察せられない歪みや苦悩。

”性同一性障害”という病気がある。

心と身体の性別が喰い違うという症状で、現在では性別適合手術……いわゆる性転換手術が施されるまでに認知された病気だ。

いや、それはもう”病気”という概念にはないのだろう。あるべき姿に帰る、ただそれだけのことなのだから。

ならば、自分の抱えるこの空虚さはどう説明がつくのだろう。

空虚？　それも違う。

ただ、感じないではいられないのだ。僕は本当に”人間”なのだろうか、と。自分でもおかしいことと思わないでもないのだが、どうしても、鏡に映る自分の姿に現実感を見出せない。

もしかしたら、人付き合いが苦手だからだろうか。

苦手、というのも違う気がする。面倒というのでもなく、むしろ、興味が無いという方が近いかもしれない。それは両親が早逝したことで、幼いうちから他人の中で生活することを余儀なくされたからか。愛情に擬した同情は決して不快ではなかったけれど、だからといって配慮を装った好奇までも許容できるものではない。特に両親の早逝が心中だったとなれば、遺された者に向けられる目も普通のそれであるはずがない。そのいちいちに付き合っていけるほど、僕は柔軟な人間とはいえなかった。

けれど、恵まれていたのは確かだ。親類縁者からは打ち捨てられたけれど、両親の残した財産のお陰で、下にも置かない扱いだった。里親こそ見付からなかったけれど、養護施設の人々はそれぞれに優しく温かかった。高校を卒業するまでは、その安穩とした生活に浸っていることができた。

善人な代理人達のお陰で、遺産は殆ど手付かずのままだった。欠けていったのはせいぜいが税金の分だけで、そこに私欲の痕跡は見付からなかった。

その遺産を譲渡した時、彼らがその瞬間を密かに待ち望んでいたのだ、と知ったけれど。

アイツは、いつも”独り”だった。

コンピューター・オペレーターという職業柄がそうだと云う訳じゃないが……うっかりすると黙々と取り組みがちになる職種にあって、特にアイツの場合は、極力一人になることを選んでいるような嫌いがあつた。

かく云う俺も、同じ職場に勤める何とかのムジナというヤツではあるんだが、俺の場合はちょっと理由がある。俺の彼女というヤツが看護婦で、日勤もあれば夜勤もあるという職業。たとえカレンダーは赤くても、入院患者がいれば仕事はあるし、急患でもっているような病院なら無人であるのは考えられない。要するに、三交代のローテーションで日勤もあれば夜勤もあるという今の仕事だと、色々と都合がつけやすかったりする訳だ。もともとコンピューターには明るかったし、ウザい人間関係も遠慮したかったこともあり、この職場に甘んじている。

問題があるとすれば、中小企業にありがちな少数精鋭体制というところか。要するに、わが社のコン・オペは三人で、三交代のシフトできつちりな勘定しかいないということ。ドラマに登場するような和気あいあいのオフィス環境は最初から望まなかったとしても、仕事場が地下にあるのは想定外だった。同僚が顔を合わせる瞬間は、某と某が交代のために引き継ぎをする時だけに限られているうえ、お茶汲みのオネエチャンすら望めない。

そこで、アイツ、だ。

アイツは、大抵俺の前のシフトに当たってるヤツで、名前は……正直云って憶えていない。俺が入社したときには既にいたから先輩ということになるんだが、就業時間のほぼ百パーセントを一人でこ

なしては、先輩・後輩の意識が育つのは難しい。そんな訳で、こんなのは俺だけかも知れないが……名前も憶えないような無礼をまかり通し、アイツのことを『ちよっと』や『あのお』と呼ぶことで誤魔化していた。

だが、アイツの方もそんなことには頓着しない性分のもので、俺同様『ねえ』辺りでしか話しかけてこなかった。その云い方は時々、二年前に仕事内容を伝授した相手が俺だ……ということすら真っ新に忘れてるんじゃないかと思うほどに投げやりだ。たった五分やそこらのレクチャーで先輩面をされては割に合わないが、それにしても何かもう少し、威厳のイの字くらい見せてくれても悪くはないような気もする。

養護施設を出た僕は、コンピューター関係の学校に入り、そのついでのようにコンピューター関係の仕事に就いた。一応資格も取ったのだが、それが何という資格だったか、それが何に必要なのかは余り記憶にないし、気に留めたこともなかった。勧められるままに入社希望を出したら、採用通知になって戻って来ただけ。仕事の内容など、学校の授業と大差ない。

幸運なことに、職場には人の姿がなかった。ビルの地下室には大型のコンピューターと作業用のデスクトップが連座するだけで、時間になれば交代要員が出勤してくる。あとは、時折警備員が詰まらなそうに顔を覗かせるだけ。

話しに聞く職場仲間とのコンパもなく、出逢いを求めて夜の街に繰り出すこともない。自分自身が求めなかったこともあるが、その必要も感じなかった。コツコツと時計の針の揺れる音だけを聞いて、毎日が過ぎて行く。

キーを打つ音と、コンピューターのモーターや冷却ファンの音。換気口から流れ出す、埃臭い風の音。遠くでドアが開閉する音。地

鳴りのように小さく響く、エレベーターの昇降音。そして、交代を告げる声だけがそこにある総てだった。

そんなアイツが殊更独りを好んでいると知ったのは、実は、かなり最近になってからだ。

入社当時はギリギリにならないと職場に出なかった俺が、最近では多少の余裕をもって出勤するようになった。まあそれは、俺の車が出勤途中にエンコして一時間も遅刻したことがあった、という教訓のためでもあるんだが……その時アイツは、文句一つ云わずに残業し、俺への引き継ぎを済ませ、じゃあの一言だけで帰って行った。それ以来、俺は遅刻だけはすまいと心に決めた。アイツのいつも通りの対応は、静かだっただけにこちらの罪悪感をストレートに刺戟した。たとえば、本人にその気はなかったとしても、だ。

何にせよ、俺が早く出勤するということは、その分、アイツの就業時間と重なるということ……要するに、俺の時間が来るまでの数分に、引き継ぎ以外のアイツを見られるということだった。

けれど、見られたからといって何だと云う話ではない。とにかく、俺はその時に『アイツは独りでいたいヤツなんだ』と感じたのだ。

普通なら、同僚が現れたら挨拶の一つもしたくなるだろう。八時間も一人で仕事をした後だ。どんなに人間嫌いなヤツでも、魔が差したっておかしくはない。

なのに、アイツはやっぱ独りで居続けるのだから。

孤独というものを、特に感じたことはない。

孤独というのは基本的に、大勢の中にあって初めて感じることな

のだろう。誰かと接する機会も多く、誰かと共有する時間も多い。そんななかでふと繋がり of 跡切れを感じた時に、人間は孤独というものを感じるようだ。そうでなければ、一人でいることが寂しい、などと思うことはない。

僕の部屋には、ラジオもテレビも、雑誌の一冊も置かれてはいない。社会の一切に興味がない訳ではないが、地下鉄やコンビニに行けばf mや有線放送が頻繁に流され、所によっては街頭テレビが設置されている場所さえある。家電店でも通りかかれば、モニターのオンパレード。そこで聞きかじり、垣間見る程度の情報で充分だ。

僕にとって部屋というのは、空腹を堪えなくても済む場所だ。眠る場所があって、身の凍る寒さを耐える必要がなければ、それで充分。

確かに、贅沢ではない。実際は、質素といっても足りないくらいだろう。現に管理人などは、直ぐにでも引越す予定があるのか、それとも逃亡中の指名手配犯なのかと思っている節がある。勿論、引越す予定も逃亡犯である事実もない。弁解する気もないので、未だに誤解されたままのはず。

だけど、彼らの囁きは、秒針の進む小さな響きとどんな違いがあるだろう。ただ、通り過ぎてゆく感触があるだけ。指の間を砂粒が零れ落ちてゆくような……いや、空気が漂い過ぎてゆくような、そんな泡のような自分を感じるだけなのだ。

人間との接点が多くないせいだろうか。

出勤途中に出遭う人の顔はその数ではないが、職場で擦れ違う数種のそれは自分の中でも特別な存在だ。特別といっても、それ自体に意味がある訳ではないけれど。ただ自分の狭く小さな世界に他人が介在する貴重な時間がある、というだけ。その貴重といえる時間さえも、ほんの数分単位のこと。

その数分のなかには、しかし、特に強い記憶で捉えることのできる人物がいた。残念ながら、名前は憶えていない。大抵、僕の次のシフトに入っている青年で、背の高い、いわゆる今時の若者という

風貌の人物。肩口まで伸びた髪は暗い金色で、着て来るスーツも毎度派手なイメージが拭えないものだ。コンピューター技師というよりも、どちらかというと水商売に向いているような印象がある。

そんな彼が何故こんな職場にいるのかというのは、以前警備員と話していたのを小耳に挟んで知っている。何でも恋人が看護婦で、彼女の勤務時間に合せて調節をした結果がこの職場なのとか。軽薄な外面とは裏腹な真面目な奴だ、と警備員が冷やかしていた。

彼の勤務状態は、よく知らない。引継ぎが終われば職場には用もないし、彼と何かを話すキツカケもその必要もないからだ。

でも、彼には感謝の言葉を贈りたいと思っている。

その機会はないだろうけれど。

よくよく考えたら、アイツは引き継ぎの時もそうだった。何処か上の空というか、空々しいというか。心ここにあらずという雰囲気がいいつも付いて回っている。でも、アイツの存在は確かにここにあるって……何と云ったものか、この世の人なのか否か判断付きかねる雰囲気満ちている、とでも云えば近いかな。奇妙なたとえには違いないが。

そんな訳で俺は、今も引き継ぎ前の数分に、そういう奇っ怪な気分アイツを眺めていた。

別に、アイツが地球外生物であっても、いっそ超常現象の一端でも構わないさ。

そう思いつつ、持て余した暇を埋めようと煙草を取り出して火を点けた。

僕は一つ、嘘をついた。

孤独を感じたことはない。実のところ、それは嘘だ。

確かに、人恋しさを思ったことはない。友人もいないし、ましてや恋などしたこともなかった。親に抱かれた記憶も曖昧ならば、人肌を懐かしく思うことも皆無と云える。

けれど不意に、あるキツカケをもって孤独を思う時がある。

それは火が――あの赤い陽炎が、目の前に出現した時だ。

ちらちらと灯る火。

ゆらゆらと揺らめく炎。

めらめらと立ち上がる焰。

僕はそこに、人間に対しては起こらない、感情の波がさざめくのを感じるのだ。

そして、僕は思う。

寂しいという、その一言を。

その時――俺に注がれる何かを感じて、弾かれたように顔を上げた。

そこに、アイツの目があった。

今まで見たこともない、アイツ自身見せようとしなかった表情。何かを憂いているような、懐かしんでいるような……。

けれど、その顔を長く見ていることはできなかった。ライターを消した途端、静かに元の無表情へと変わっていったからだ。

まるで、マッチが静かに燃え尽きてしまったように。

自分の軀には、大きな火傷の痕がある。右の手の先から胸部に至るまでの、決して小さいとはいえない痕。

それは総て子供の頃にできたもので、本当なら、顔にもその痕を

残しているはずだった。それ自体は右手の指と肘間接を形成した時に一緒に治してしまったので、一目では確認できないまでに修復されている。しかも、僕の軀に残る火傷痕は、それだけとは云えなかった。

実は、両親の心中はここに理由がある。

幼かった自分は、火を警戒するということがなかったらしい。親がどんなに注意をしても、少しでも目を離すと火に接していたようだ。

接していたという表現は正しくない。自分はいつも、文字通り火に触れようとしていたのだ。

この軀に残る疵は、その接触の証しだ。そして、両親を自殺に追い込んだこの一番大きな火傷痕は、学校のオリエンテeringの折に、自らキャンプファイヤーの炎に飛び込んだ名残りだった。

その当時の自分は、何故自分がそんなことをするのか判らなかった。けれど、そうすることで得る安堵感があったのを憶えている。何故、安堵なのかは判らない。火はとても熱いし、火傷が完治するまでは痛くて仕方がない。いつもいつも、決まってとても苦しんだというのに。

そんな自分を、両親は見ていらなかったのだろう。僕を見舞った病院からの帰り道、父の運転した車が制限速度を超過してガードレールに激突した。書斎で遺書が見つからなければ、交通事故として処理された最期だった。

両親の乗った車は、漏れ出たガソリンに火花が引火して爆発、炎上したらしい。その悲報を聞いた時に憶えているのは――ただ一つ、羨望の念だけだった。

白状すると、今でも同じような衝動に掻き立てられる。

理由が判らないのは相変わらずだけれど、年を取るにつれ、一社会で生活するということがどういうことかを自分は学んだ。今暮らす部屋は、全く火の気のないシステムを敢えて選んだ。職場なら当然で、極力火に触れることのない生活を心掛けている。昔のように

衝動に任せはしない。そんなことをすれば向かう先は間違いなく精神病院で、そこに入ってしまったえば、今以上に無気質な毎日が繰り返されるだけだろう。

何か有意義な、価値あることを成し遂げたい訳じゃない。ただ、懐古の念に似た思いを抱く瞬間くらい、許されたいと思うだけだ。

その箍が外れる瞬間なんて、手近なところに転がっていたけれど、いつものように、ただ目の前の雑事を片付けていた。時間だけを浪費し、役目が終わる瞬間を待っていた。その時、彼の姿が目に入った。

特に興味のない色で、彼が自分を眺めているのが判った。時間が来るのを待つ慰みに、ただぼんやりと視線を泳がせているだけ。こちらにも知らぬ振りをするのは、それさえいつものこと。

なのに、その時だけは彼に注意が向いた。正確には、彼の手許に彼の口元には、煙草が咥えられていた。そして、それに添えられるライターの小さな灯火。

その瞬間、恐るべき何かが躰中を駆け巡った。蓄積された渴望の意味を叩き付けられたような、そんな勢いで。

帰りたい。

そう、思ったのだ。

ただ、帰りたい——と。

その数日後、思わぬ悲報に我が耳を疑った。

それを聞いたのは、夜勤を終えて帰宅後、一眠りしようとした時のことだった。聞き慣れたもう一人の同僚の声が、電話の向こうでその内容とは裏腹に何処か上の空で響いていた。

『シノザキさんが死んだって』

始め、何の話しだかさっぱり判らなかった。シノザキとは誰なのか、その人物が死んだことに何の関係があるのか、全く見当を図り

かねていた。しかし、ヤツは俺の疑念を見事に払うハンマーパンチをお見舞いしてくれた。

『アイツだよ。アイツが死んだんだよ』

ようやく合点がいった俺に、ヤツは少し上擦った声で云った。

『自殺らしいぜ。自宅の傍で、焼身自殺したらしい』

そのとき俺は、不意にあの引き継ぎの時のことを思い出していた。アイツが初めて俺を見た日。俺はアイツに、仕事以外のことを初めて話しかけた。

さつき、こっち見たけど何で？

当然というか、案の定というか、アイツはまるで聞こえなかったとでもいうように、すんなり無視を決め込んでくれた。なのに、その無視の仕方が余りにも自然で、俺は腹を立てることもできなかった。

ただ、何となく感じたのは……あの視線は、俺を見ていた訳ではないということだった。

自宅の近くには、小さな公園があった。近所で唯一の憩いの場。少なからずの木々が乱立し、休日には家族連れや恋人達が散策を楽しむ場所だ。

だから、特に何かを用意しなければいけないということはなかった。寄せ集めれば、それなりに枯れ葉の山ができあがった。誰かが捨てたのか放置したのか、新聞紙や雑誌の類も散乱していた。それらはこしばらくの青天に、乾いた音を響かせている。

手の中には、先に買い求めた安物のライターが入っている。その何年ぶりかの感触を楽しみながら、枯れ葉の一枚に火を近付けた。ゆるりと広がる炎を見つめながら、ある確信にため息を洩らす。この炎は、確かに僕を包んでくれろう。そして、その確信はすぐに現実のものとなるだろう、と。

一枚の枯れ葉からもう一枚へ、そして重なり合った葉から葉へ、ゆるりと全体に火が広がっていく。小さな爆ぜる音にふと思い出したのは、まだ小さかった自分の姿。赤い夕焼けに染まった空の下で、帰路を急ぐ幼い僕。その顔は希望に溢れ、幸せに満ち足りていた。その幸福感は、迎え入れてくれた両親の微笑みと、家中を満たした食事の匂いで更に輝きを増したはず。ただ現金なだけ、だったのは確かだ。でも、何気ない平凡な毎日に幸せを感じられた自分がいたのも確かだった。

何故、僕はその幸せを手放してしまっただろう。

立ち上がる焰の中に手を押し入れる。文字通りに身を焦がす強烈な熱に、皮膚が悲鳴を上げるように収縮する。どんな形容をも足りないと思わせる痛み、そして、痛みのために起こる猛烈な痙攣に襲われながら、袖を撫であげていく焰を凝視した。

叫びだしたいほどの苦痛に何度となく腕を引き抜き、身を冷やしたい衝動に駆られる。なのに、そうすることを望まない自分がいる。焼け縮れ、爛れていく肉体に比例するように、大きな悦びが全身を満たしていく……。

久し振りに微笑んでいる自分を、その時はっきりと意識した。

アイツの葬儀は、かなり簡素なものだった。親兄弟もいなかったのか、十年以上も疎遠だったという叔父が喪主になっていた。

貧相な仏壇に置かれた、既に荼毘を済ませた白木の箱。低い噂に聞いたが、発見された時には殆ど燃え尽きていたらしい。

遺影には、相変わらず無表情のアイツの顔がある。多分、数少ない写真から辛うじて写っているのを選んだんだろう。何とか見られるものにはなっているが、小さな顔を画像ソフトで拡大してから修正したというのが丸判りの写真だ。もしかしたら、履歴書の写真を転用したのかも知れない。

だけど、おかしいかな。生きて生身でいるよりも、この方が何処かアイツらしい。

その時ふと、思い至った。

アイツはきっと、自分の世界に帰っていったのだ……と。

(後書き)

ご精読ありがとうございました。

ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5187j/>

孤独の人

2010年12月31日22時55分発行